



明るい陽光が差し込む受付。待っている方も何気ない雑談をしたり、その方の状態に合わせて座りやすい椅子を勧めてみたり、スタッフの細かい配慮が待ち時間のストレスを軽減する。



三好氏が開院当初から変わらず新入社員に渡すオリジナルのマニュアル。理念や努力目標、「多様性」、「フォローシップ」といったキーワードとその思いなどが丁寧に綴られていた。

また一人と思いをともにする仲間が増えていった。

「患者さんやスタッフと接する時、言葉のニュアンスや表現を大事にしたいと思っています。正確であることも大事ですが、印象に残る表現をすることで、相手の行動を変えられると信じています」。学生時代にアスリートとしての自分を支えてくれた先生の存在、そのことで自らの将来が切り開かれた経験が、今の三好氏の医療者としての信念につながっている。決してごまかさず、自分にも相手にも真摯に向き合う姿勢だ。

そうした思いを丁寧に綴った、型にはまらない「オリジナル」のマニュアルがある。開院当初から必ずスタッフに渡す教科書代わりのメッセージだ。「このマニュアルを、たまたまスタッフ伝てに目にして当院を知った方が、ここで働きたいとさせてくれたこともあります」。

「患者さんからの信頼を生む チームワーク」

「ちょうど今週、うれしいことがあったんですよ」と、三好氏は嬉しそうに患者さんにかけてきた言葉を教えてくれた。「あなたのところは問診がすこいね」。2回目の診察の日に、患者さんは先生にそう漏らした。「ちゃんと報告してくれなかったのだ」。三好氏は先生に「私が診察をはじめる時点ではほとんど診断ができてくるような状態で問診が上がってくるんです。ポイントを抑えているので、その後の処置の準備まで整っているような連携ができています」と問診の質にも自信をのぞかせた。

そうした連携のポイントには、やはり信頼関係にあるのだろう。患者が求めていることを常に考えて動くこと。互いの領域を超えて、的確に行動しようとする意識があるから質の高い連携が図られる。そのことが患者にとっては安心につながるのだ。仲間が仲間を呼んで確立してきた確実なチームワークは、クリニックの評判につながり、結果、クリニックの経営面を支えることにもつながっている。

「点数や単位のノルマを設けたことは一度もありません。経営面で考えると、いかに単位をとるか、考えた方が安定するのかもしれませんが、それは本質からずれてしまう。医療の世界に入った時

仲間とともに 育む地域医療

Interview with
Kanta
Miyoshi

「前編」

開院10年を迎えるあさのひ整形外科クリニック。院名には「クリニック周辺に広がる豊かな自然と朝の太陽の南向きで元気なイメージを」という思いが込められている。昨年増床したりハビリ棟には、ADLを観察・再現できる浴室やキッチンスペースが設けられ、整形外科疾患に限らない幅広い治療に専念できる環境が整った。新興住宅地に近いこともあり、利用者は40代～小中学生の割合が60代より多い同院では、アスリート向けのリハビリも新設した。福岡市西区での開院以来、徐々にマンパワーを確保しながら、患者が必要とする医療環境の充実に力を入れる院長の三好敢太氏に話を聞いた。

三好 敢太氏

あさのひ整形外科クリニック院長
1998年 鹿児島大学医学部 卒

PROFILE

日本整形外科学会/日本足の外科学会/日本臨床スポーツ医学会所属



マンパワーが強みになる

三好氏がサッカー選手だった高校生時代、大会直前の怪我を熱心に治療してくれた治療院の先生がいた。なんとか克服し、大会に出場することができた。その時、アスリートとしてのモチベーションを支えてくれた先生のように、自分もスポーツ整形外科で選手をサポートしたいと、医師を目指した。大学の医局に所属しながら、スポーツ関連のイベントや、小中学生の合宿にメディカルスタッフとして同行するなど、学びにつながる経験には積極的に参加してきた。熊本でサッカーチーム専属のメディカルチームのドクターとして1年、その後福岡へ移り、勤務医を経て2011年に開業へと踏み切った。

実は、「自分が思い描く、理想の治療を展開できる場所をつくりたい」と、開院当時から、拡張後のリハビリテーション環境は想定していた。「もともと二次計画として、リハビリ棟の構想はありました。具体的には、ということまでは決めていませんでしたが、今のスタッフが集まってくれて、マンパワーが整ったことが、増設のきっかけです」。三好氏が言う、この「マンパワー」こそ、あさのひ整形外科クリニックの大きな強みになっている。

現在スタッフ数は14名。開院時からすると2倍に増えた。「開院当初は、大規模にリハビリをやりたくて、一般募集したこともありましたが、応募はあっても、本質的に医療に取り組みたいと思っている人

が実は多くはないと感じたんです。なかなか良い人に巡り会えず、リハビリのことでまで全部自分でやった時期もありました」。そう当時を振り返る三好氏が、リハビリ施設の基盤を作るために、大事にしたことがある。「規模の拡大をしても中身が薄くては単なる膨張です。脆く、割れやすい状態では、思い通りにいきません。時間がかかっても、中身の濃い、本質をついた医療をしたいというのが、当初からの考えです」。

味のある脇役として 思考を続ける

では、どのようにそのマンパワーが集まってきたのか。その答えは、シンプルに仲間が仲間を呼ぶという、人伝いで広がった。あさのひ整形外科クリニックでは、「関わる全ての人の立場に立つて考え、行動しよう」という理念を掲げている。あくまでも治療の主役は患者さんであり、医療者は脇役。「目立たないが欠かせない、味のある脇役として役割を果たそう」というのが、三好氏が、新人研修でも日常でも、ことあるごとにスタッフに投げかけてきた言葉だ。思考を継続して、常に役に立つことを考えて行動すること。自分本位にならず、相手になりきったらどうなるか。一見当たり前のようで、日々の業務に追われると、自分主体で優先順位を決めてしまうことがある。繰り返す口にし、スタッフと対話を続けることで、一人、

自分の気持ちを「ごまかしながらではなく、人の役に立とう」という気持ちに、自ずと結果がついてくると考えています」。

「後編では「リハビリの現場」について お話を伺います。



あさのひ整形外科クリニック
福岡県福岡市西区富士見2-14-7